

オランダの「言語自殺」論争

オランダの大学では今、学術用語としてのオランダ語が危機に瀕しているという⁽¹⁾。グローバル化の勢威の中、国際競争に打ち勝つために、英語での授業提供を強いられているからだ。オランダ語の授業では留学生が集まらないというので、オランダ語はアカデミズムの諸領域から駆逐されつつある。こうした現状に対して、ついにオランダ王立芸術科学アカデミーが立ち上がり、「言語としてのオランダ語の質を守り維持することに失敗し、英語の重要性を過剰に評価している」と警告を鳴らした。

オランダ語と言えば、鎖国時代の日本にとって唯一の西洋の学術の窓であり、文字通りオランダ語による学問、蘭学という言葉すらあった。杉田玄白らが苦心して翻訳した『解体新書』の底本は、長崎出島の商館長より入手したオランダ語の『ターヘル・アナトミア』である。また緒方洪庵の適塾では、蘭和辞書が一冊しかなく、福沢諭吉など塾生たちが争うようにこれを用いた話はあまりに有名である。

このように日本の学術史上においても重要なオランダ語であるが、いまや本国では、学術用語としての母国語の使用を英語に明け渡しかねない危機に陥ってしまっている。世界大学ランキングの基準の一つに「国際化」が挙げられるが、その重要な指標になるのが英語の導入率である。しかし、これは全く不公平な指標ではないだろうか。なぜなら、初めから英語圏の大学、とりわけアメリカの大学が絶対的優位に立つからである。

オランダでは国民の大半が英語を話すことができると言われているが、英語はやはり外国語である。学術的な繊細さやユーモアを表現できるのは、何と言っても母国語のオランダ語にしかくものはない。そもそも母国語で学術を論じられる国はそう多くないというのに、これをみすみす英語に譲渡してしまっは、「言語自殺」と批判されても仕方がないだろう。

小国が大国に対抗するために

これとよく似た状況が 19 世紀前半のデンマークにもあった。当時、ヨーロッパで大国といえば、デンマークと国境を接していたドイツであり、軍事経済面だけでなく、学術文化面においても、大国ドイツに対して小国としての悲哀を嘗めざるをえなかった。デンマーク独自の学術文化があったとしても、デンマーク人が書いたデンマーク語による著作や論文が一段低く見られ、ドイツで評価されてはじめてデンマークでも認められるようなありさまだった。当然ながらデンマークでは、ドイツの学術が幅を利かせていた。哲学の領域で言えば、それは当時隆盛を誇っていたヘーゲル哲学であった。

キルケゴールはそのような時代環境の中で成長した。彼はコペンハーゲンからベルリンまで、ヘーゲルと同じドイツ観念論学派に属するシェリングの講義を聴講に行ったことがある。彼はドイツ語が十分聴き取れたし、ドイツ語の書物も完全に読解することでできた。しかし、当時のデンマーク知識人の中にあつて、ドイツ語会話はあまりできなかったようだ。彼はむしろ母国語のデンマーク語を終始一貫して大切に、20 年間に満たない著作活動の期間に、質・量とも驚異的としか言いようがない著作群をすべてデンマーク語で書き、デンマーク語でなければ言表できないとも言われるような思想的境地を開拓した。これらの著作における、逆説弁証法を駆使した論理展開、またその文学的な表現や文体を見れば、キルケゴール以上にデンマー

ク語を学問的・芸術的に深く広く、また繊細に究めた思想家は他にはいないのである。

もしキルケゴールが大国ドイツで認められようと、ドイツ語で書いていたとしたら、これらの著作群の 100 分の 1 も書き残すことができなかつただろうし、それらの書き物もキルケゴールのキルケゴールらしさを発揮することはできなかつたと想像される。彼は『人生行路の諸段階』の末尾のところで、偽名著者の一人フラーテル・タキトゥルヌス（沈黙の兄弟）に、自分が母国語デンマーク語といかに幸せに結び付けられ、この言語を通じて思想がいかにしなやかに表現できるものであるかと、デンマーク語讃歌を謳わせている。それほどまでに、キルケゴールの著作はデンマーク語と切っても切れない関係にあるのだ。

母国語による発信こそ学術の命

当然ながら、キルケゴールの研究者たる者は、デンマーク語でキルケゴールの著作を読むことが要求される。我が国のアカデミズムでも、一昔前ならいざ知らず、現在ではドイツ語訳や英語訳でキルケゴールを読んで論文を書いたというだけで、研究者として 1 ランク下に見られてしまうところがある。

しかし、ここに大きな逆説 ^{パラドクス}paradoks がある。他の国ではいざ知らず、我が国のキルケゴール研究者はいずれも日本語で論文を書いている。日本人であれば日本人としてのアイデンティティがあり、日本語で書く以上は、そこでの思考回路は日本語を通してのものである。どの言語で読み、どの言語で書くにせよ、研究において大切なのは、テキストをどれだけ深く読み込み、どれだけ論理的な説得力をもって書き表すかということである。日本人研究者が最も得意とする使用言語は、当然母国語である日本語である。

現在ではデンマーク語原典からの日本語訳によるキルケゴールの著作はほぼ揃っている上に、デンマーク語を含め、英独仏の主要なキルケゴール研究の多くが日本語訳されている。これら日本語による文献だけでも、大型本棚一架分は優に占める。

日本人にとって、日本語を切り離してのキルケゴール研究は事実上あり得ない。そして日本におけるキルケゴール研究の水準が優れていればいるほど、また日本人研究者ならではの獨創性を発揮していればいるほど、世界中のキルケゴール研究者はキルケゴールに関する日本語文献を無視することができなくなる。⁽²⁾もしかしたらいつか、世界中のキルケゴール研究者は、デンマーク語の文献を読んだ上で、次に日本語キルケゴール文献にも精通していないと、国際的キルケゴール研究者として認められないことにならないとも限らない。そうなれば、日本人研究者にとって、これほど喜ばしいことはないであろう。

ことはキルケゴール研究だけにとどまらない。とりわけ人文の領域において、過度に英語に傾斜しがちな現代のグローバル化の勢威に対抗するためにも、それぞれの母国語を駆使した研究を徹底的に究めていくことこそ、なによりもまず肝腎なことではなからうか。

[注]

- (1) 『産経 WEST』配信記事「【世界を読む】英語に席卷される大学オランダで「言語自殺」論争 日本語の未来は」(2018 年 7 月 13 日) (<https://www.sankei.com/west/news/180720/wst1807200001-n1.html>)
- (2) 日本人によるキルケゴール研究はすでに英語圏で注目されており、*Kierkegaard and Japanese Thought*, ed. by James Giles, Palgrave Macmillan (New York), 2008 のような書物も刊行されている。